

第一志望学科・専攻	受験番号
-----------	------

※答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

問題一 次の文章をよく読んで後の問いに答えなさい。

「^ア地方」という言葉は、現在ではつねに「中央」との対比で口にされます。けれども「^イ地方」はもともと「中央」ではなく「^ウ町方」に對置される言葉でした。これについては^A民俗学者の柳田國男の指摘があります。日本の町は、防塁によって囲われたヨーロッパの都市とは異なつて、農村部とならかに、そして¹ヒンパンに交通しあうものでした。「都市と農村」という論考のなかで、柳田は、日本の都市が「もと農民の従兄弟」によつて作られたという言い方をしています。つまり都市と農村の問題を都鄙のそれとして論じるのは不用意だということです。都鄙として対立するどころか、農村が都市を食料供給のみならず人的にも支えていた。町人のみならず武士の大半もまた農村から移り住んできた者であつた、と。

その農村の現代における²ヒヘイについて、柳田はこう指摘しました。その主たる原因は「自然に反した生産の單純化」にあると。米田一色といわれる集落にあつても、かつて人びとは大豆や野菜を栽培し、³カイクを養い、隣村の茶畑にも働きに出た。また工夫を重ねて、養鶏家や果樹園主、牛乳屋や油屋に転業したりした。が、こうした仕事の大部分は「村外の資本事業に取り上げられ、いわゆる農業の純化は⁴ハナハだしく生存を狭隘にした」。そしてこれがその後、柳田の知るところではありませんでしたが、ついに農業自体の放棄へと行きつき、大規模な部品工場や原産の⁵ユウチといった地域の産業構造の單純化というかたちをとるまでになつたわけです。そして彼はこれを書いた一九二九年の時点で「地方分権^B」も口にしています。中央市場、中央政府のひも付きから脱却し、農村経済の自主性を回復すべきことをこの語で^B謳つたのです。

（鷺田清和『社会に力がついたらと言えるとき』より）

問一 傍線部1～5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〳〵部ア・イ・ウの読み方を、文意を考えて平かなで書きなさい。（三つとも違います）

問三 傍線部Aについて答えなさい。

① 柳田國男は、ヨーロッパの都市と農村はどういう関係だと言っているのですか。端的に述べられている部分を10字以内で抜き出して答えなさい。

② 日本の都市と農村の関係は、具体的にどうだったと言っていますか。25字以内で抜き出し、始めと終わりの5文字を答えなさい。

問四 傍線部Bについて答えなさい。

① 「この語」とは何のことですか。文中より10字以内で抜き出しなさい。

② 「謳^{うた}った」とはどういう意味ですか。次の中から最適なものの記号を答えなさい。

イ 話した ロ 主張した ハ 歌を作った ニ うわさした

③ 「この語で謳^{うた}った」ことはどんなことですか。文中より40字以内で抜き出し、始めと終わりの5文字を答えなさい。

（問三・問四 句読点・記号は1字と数える）

問題二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私は俳句の「軽さ」に関心をもっている。芭蕉が言った「A」という言葉があるが、私にそれがよく会得¹できているかどうか自信がないから、現代の言葉で「軽さ」と言っておく。私は「軽さ」を出せる俳人は本物だと思っている。

今出ている定本の『高濱虚子全集』（毎日新聞社刊）の月報にも書いたのだが、虚子の贈答句にはみごとな句が多い。その中に、虚子二十三歳の句がある。

明治二十九年春・紅緑子の笠に題す

陽炎がかたまりかけてこんなもの

この年三月、虚子は長兄の病気のため松山に帰った。しばしば漱石とも会っていた。そこへ佐藤紅緑が訪ねてきたのだろうか。紅緑は虚子と同じ歳で、子規門の朋友である。もしこの句が松山での作なら、紅緑はこの時四国めぐりの旅をしていたものだろう。その旅人の笠に題した句だが、春の旅人に贈る句として、これは抜群のものではないか。笠を称して「陽炎²がかたまりかけ」たものと見る機転、そしてそれを「かたまりかけてこんなもの」と軽く、しかし考えれば考えるほど正確無比に言いとめた力量は、ただものではない。句が潑^{はつち}瀾と呼吸している。旅人の頭上の笠は、この句によって気体の軽さをもつことになった。旅人の足はこの言葉の冠をかぶることとどれほど軽やかになったことだろう。俳句ではなく、ことさら俳諧と言ってみたい心の新鮮な動きが、この句にはありありと感じられる。即興の極意³を、二十三歳の虚子は早くもつかんでいるようだ。それが、人に贈る句として出ているところに、俳句というものの最も大切な問題の、少なくとも一つが、ひそんでいるのではないかと私は思う。

（大岡信 『秀句の条件を問われて』より）

問一 傍線部1～3の語の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄Aに、松尾芭蕉の晩年の俳諧理念の一つで、現代の言葉では「軽さ」といわれる言葉を入れなさい。

問三 ~~~~~部「この言葉の冠をかぶる」とありますが、それは具体的にはどのような状況のことですか。解りやすく説明しなさい。

問四 文中の俳句に現れている、作者虚子の心情としてふさわしくないものを、次の中から3つ選び、記号で答えなさい。

- イ もてなしの心 ロ 相手を軽んじる心 ハ 熱烈な友情 ニ 軽い諧謔の心
ホ 旅をねぎらう心 ヘ 兄の病気を気遣う心

第一志望学科・専攻	受験番号
-----------	------